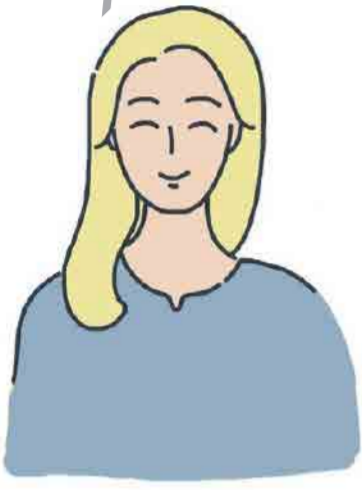


石岡未来会議とは



どんな場なの？

- まちは暮らしの場であり、働く場、そしてひとが育つ場でもあります。だから、この石岡市を「良いまち」にしたい。
でも、「良いまち」ってどんなまちでしょうか。どうしたら「良いまち」になるんでしょう。その答えを探す「対話」と「協働」の場が石岡未来会議です。



コロナ禍のため、未来会議は令和2年度からオンラインで始めました。

何を目指しているの？

- 市民と市職員が、**情報を共有し、垣根を越えて、ありたいまちの姿について対話**をする。
- 対話を重ね、市民と市職員の**信頼関係を築き、協働できる関係性**をつくる。
- そして、市民と市職員がつながり、より良いまちづくりの**アイデアが生まれ、実現していく**ことを目指しています。



▲令和4年度 石岡未来会議

どうやって始まったの？

- 石岡市民会館が閉館したことに伴い、令和2年度に、新しい文化施設の整備に関する意向調査が行われました。その一環として、「私たちの暮らしを豊かにする文化施設とはなにか」をテーマにしたオンラインの対話の場をもつことになりました。
- 「オンライン会議は初めてだけど、このまちの未来についてみんなで考えたい」という石岡市に思いをもつ10代～80代、43人から申し込みがあり、全4回で実施しました。
- そこで出た「石岡の文化やひとに出会える場が必要」という声を受けて、市民と行政の協働によるまちづくりを進めていくために、施設ができた後の未来に先んじて、「石岡未来会議」を続けることにしました。



どんな人たちが参加しているの？

- 石岡市に思いのある市民・市職員
- ファシリテーター（石岡オンライン対話の会）
- 性別・年代・居住地を問わず、**石岡市に「思い」のある人たちが集まっています。**



石岡市の「対話と協働」

石岡市では、市民と行政が連携、協力して、まちづくりに取り組んでいくため、平成26年に「協働のまちづくり条例」を制定しました。また、石岡市総合計画（令和4年～13年）には、生涯にわたり誰もがあらゆるライフステージで、輝く未来を創り上げることができる石岡市を目指し「安心・安全」・「魅力・発信」・「対話・学び」の3つの基本理念が掲げられています。

協力団体・「石岡オンライン対話の会」

新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴い、立候補者のマニフェストを聞く機会が減ってしまった「石岡市長選挙（令和2年4月）」で、市内在住の女性2人が、立候補者インタビューをオンライン上で実施したことをきっかけに立ち上げた会。市民がゆるやかにつながる対話の場づくり等を行う。



姜 咲知子 (かん さちこ) さん
岡山県出身。2009年、石岡市に移住。有機農業を行う「暮らしの実験室やさと農場」企画事務スタッフ。会議や話し合いのファシリテーター。



平方 亜弥子 (ひらかた あやこ) さん
佐賀県出身。2019年、石岡市に移住。CMやテレビ番組のナレーション活動のほか、こどもと大人のための音楽チーム「ヤミィ」共同主宰。

2

令和2年度・3年度 石岡未来会議 開催報告

これまで話し合われてきたこと

令和2年度 暮らしを豊かにする場所をまちにつくる
—新しい文化施設のかたちを探る—

- 第1回「石岡のいまを知る」
- 第2回「育てたい石岡の文化を考えよう」
- 第3回「文化を育てる仕組みとは？」
- 第4回「暮らしを豊かにする場所を、まちにつくろう」



詳細HP



令和3年度 石岡市の「協働のまちづくり」を考える
—どうしたら、みんなの力を合わせられるか—

- 第1回 石岡市の協働のまちづくりの現状を知ろう
- 第2回・第3回 地域活動の実践者のお話を聞こう
- 話題提供者：やさとおあぞら♪・NPO法人 八郷・かや屋根みんなの広場・NPO法人 まちづくり市民会議・石岡市社会福祉協議会
- 話題提供課：生活環境課・都市計画課・コミュニティ推進課・文化振興課・生涯学習課・政策企画課・中央図書館



詳細HP



参加者の声

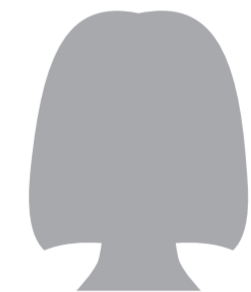
令和2年度：43人
令和3年度：33人



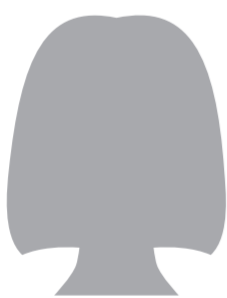
(令和2年度参加者30代男性)

石岡に移住してきて、もっと自分の町を良くしたい!子どもたちのためにも何とか盛り上げたい! 常々感じながら生活してきました。あれがない、これできないと考えがちでしたが、実は僕が知らなかっただけで、こんなに素敵な人、環境、文化があるんだと知ることができました。

最初は、文化施設という事で、建物などの箱の事ばかり考えていましたが、実際には、石岡には、どのような人が住んでいて、どのような要望があり、人生や関わりを持っていきたいのか?街をどうして行きたいのかという人の未来創造と両輪だった事に気づかされました。



(令和2年度参加者40代女性)



(令和3年度参加者30代女性)

市職員の方がこんなに地域の情報やネットワークを持っているとは知りませんでした。何か地域のことや困っていることや進めたいことがあったら、まずは市役所に相談してみようという、信頼感と期待感が生まれたことが今回の大きな収穫でした。職員の方を身近に感じられる機会がこれからもあると嬉しいです。

市内の活動を知れただけでなく、市役所の皆さんの顔や思いに触れることが出来たことで、市役所への愛着がぐっと高まったように思います。



(令和3年度参加者30代男性)

会議から生まれた出来事・つながり

●石岡未来フェス

石岡未来会議を通して、市内にさまざまな人がいるのに、知り合えていなかったということから、ファシリテーターを務めた石岡オンライン対話の会が、出会っていない人たちが出会う場、知り合っている人たちがもっと深くつながる場、さらに何かが始まるのを後押しする場に育っていったらという思いをもって、2021年1月から月に1回のペースで、石岡未来フェスというオンラインの対話の場を開いています。

問い合わせ：石岡オンライン対話の会 tsunatsunaken@gmail.com

●小学校との連携授業

令和3年度の石岡未来会議での話題提供がきっかけで、市立東小学校の総合的な学習の時間において「ごみ減量」をテーマに授業が行われました。生活環境課の職員や体験的な学びの場をつくる「やさとおあぞら♪」がゲストティーチャーとしてオンラインで登壇しました。



3

令和4年度 石岡未来会議 開催報告 1

オンラインからリアルへ。筑波大学 茅葺き研究拠点で開催

今回の経緯

- オンラインで開催したことで、子育て世代が参加しやすくなったり、市外・県外に暮らす石岡に思いのある人が参加したりと、オンライン開催だからこそ出会えた人たちがいました。
- 一方、オンラインだけでは出会えない人同士もいるはず。そこで3年目となる今年は、完成したばかりの筑波大学の茅葺き研究拠点をお借りして開催することにしました。
- 参加人数：21人



実施体制

- 令和5年度の認定にむけて、現在、「文化財保存活用地域計画」を作成している文化振興課と、協働のまちづくり推進事業を担当しているコミュニティ推進課が協働で開催。
- ファシリテーター：姜 咲知子 平方 亜弥子
- 協力：筑波大学
建築・地域計画(山本幸子)研究室

◀会場説明:
平成30年度に石岡市に寄贈された茅葺き民家(葦穂・上山)。筑波大学が5年かけて、茅葺き屋根や母屋の改修を行い、令和4年5月に完成。

3年目の石岡未来会議のテーマと目指すもの

テーマ

- コミュニティと地域の文化を発見する

目指すもの

- 多様な主体の出会い・連携 (過去2年間の石岡未来会議の参加者・地域コミュニティで活動する区長・文化財保存活動を行う市民)
- 会議で出たアイデアを「文化財保存活用地域計画」に反映する
- 市役所内部の連携 (コミュニティ推進課・文化振興課)

ねらい

- 会議を通して、石岡市の関係人口*を見える化する
*関係人口とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉です。

テーマの背景

- 世帯数の減少と、高齢化が進む地域の「コミュニティ」。地域コミュニティのなかにある「地域の文化」。
- 全3回を通して、地域コミュニティと文化財の現状を把握し、よりよい形で、未来につないでいく方法を考えていくため、過去の石岡未来会議の参加者と、地域で活動する区長、これから地域に根付いて活動していきたいと考える移住された方に集まっていただきました。

8月28日(日) 第1回 地域に対する思いを知り合う



(話題提供)

- 「文化財保存活用地域計画」とは
文化振興課 谷仲俊雄さん



説明動画



- 「茅葺き民家を利用した
地域再生拠点づくりプロジェクト」
筑波大学 石井裕樹さん



説明動画



(対話のテーマ)

- 私たちはどんな文化や伝統行事、風習、風景を残したいのだろうか？

9月11日(日) 第2回 文化を守り、生かす事例を知る



• 鳴滝会による保全活動



• 中山開拓の茶畑再生



• 東田中の田んぼプロジェクト



• BookCafeえんじゅの古民家活用

※各事例の詳細は、パネル5以降を参照。

(対話のテーマ)

- 地域、新しい担い手(市内、市外)と、どのように協働の輪を広げて、持続可能にしていけるだろうか。



4

令和4年度 石岡未来会議 開催報告 2

第3回

10月2日(日)

未来人になって、コミュニティと地域の文化を守り育む方法を発見する

ワーク1 「2050年の石岡市に旅立ち、日本一住みやすいまちになっている石岡市の様子を実況する」

●協働のまちづくりがうまくいって、人口減少が止まった石岡市。文化財保存活用地域計画がきっかけとなり、地域の文化財が活用されている2050年に今の年齢のまま旅立つという設定で、ワークショップを行いました。



●課題から考えると、財源や人材が足りないという現実が立ちはだかり、新しいアイデアや解決の道筋を描くことが難しくなってしまいます。そこで今回は、どうやってその状態になったかは、一旦置いておいて、いろんな問題が解決された2050年に、意識を飛ばして、その様子を実況中継します。2050年に飛ぶためのアイテムは、手ぬぐい。思い思いに身に着けて、未来人になりきります。



ワーク2 「2050年の未来人から2022年の石岡市民へのアドバイスを検討する」

●あのとき、〇〇しておいてくれたから、こんなに素晴らしい2050年になったよ。だから今、〇〇をしておいたほうが良いよ。と未来人の視点から、2022年の石岡市民へのアドバイスを考えます。



ワーク3 「グループで出たアドバイスを 用紙に書き出す」

各グループのアドバイスのなかで、良いと思ったものに投票します。投票の機会は、1人3回。1人1票の投票システムだと、一番良いと思った意見だけしか残らず、一番には選ばれなかったけど多くのひとが良いと思った二番目以降の意見が消えてしまいます。そのような意見が見えてくるような仕掛けとして、以下のやり方で実施しました。

- ・一番良いと思ったものにはピンク色のシールを3枚(●●●)まとめてはります。
- ・二番目に良いと思ったものには青色のシールを2枚(●●)まとめてはります。
- ・三番目に良いと思ったものには青色のシールを1枚(●)はります。



2050年の未来人からのアドバイス

好きで通っている人達と地元の人がつながる場を作ろう！(コミュニティスペース)→担い手の確保に(ピンク11・青11)



地域にあるお祭りの歴史掘り起こす、残す、伝えていく→参加しよう！(ピンク9・青4)



色んな地域で、未来会議をしよう(ピンク9・青3)



石岡の未来に熱い想いをもち若者を探し、育て、支えよう！(ピンク9・青2)



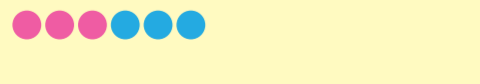
未来のみんなの学校像を語り合おう！(ピンク9・青2)



循環型農業を広めよう！一食育 一里山保全 一農地バンク 一農薬除草剤を使わない(ピンク9・青9)



茅葺き民家を含む里山景観の発信と活用を本気出せ！！(ピンク3・青3)



借り手を登録できる空家バンクやマッチングシステムを作る(ピンク3・青8)



渡辺直美に石岡のアイドルグループをプロデュースしてもらおう！(ピンク3・青1)



単なる観光客ではない、関係人口増のためのお試しSTAYをやる(ピンク1・青10)



文化財をテーマにした絵画・写真コンクール(動画の部)を始めよう！(青7)



生産者が値段を決める“八郷型”農業を確立する(青1)



大人が石岡市の伝統行事・農業・文化を知り、子どもたちに楽しんでいる姿を見せ、伝えていこう(青3)



地域に開かれた学校(子どもが学ぶ横で地域の人がつどう)をつくろう(青1)



古民家を公共スペースとして色んなひとたちが交流できる場所にしよう(青1)



石岡市内GoToや市外の人に来れる「街全体ホテル」を作ろう



イノシシを活用した食文化(生活文化)を創りあげよう



地域行事や自然環境を楽しむ!!姿を子どもたちに見せよう



「鳴滝会の保全活動」

01 鳴滝会とは

鳴滝の清掃活動を行う有志の市民グループ。鳴滝のある瓦谷在住の住民を中心に、東京都内のメンバーも在籍。人数は14人ほど、年齢層は50代～70代。建設業を営んでいるひとや、外作業が好きな住民など、それぞれ得意分野や好きなことを持ち寄って、地域のために活動をしている。

活動のきっかけは、30年ほど前に(平成7～8年頃)、ご近所の気の合う4人で、鳴滝で行った花見。ここから、人の輪が広がり、季節ごとに交流会を行うようになる。

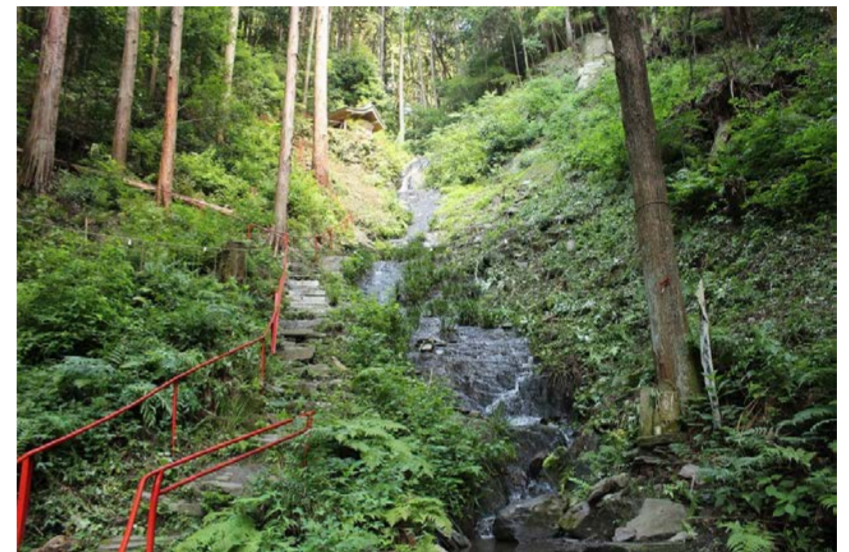
10年が経過したころ、鳴滝周辺の草刈りを行おうという発案があり、活動を始めた。

両桁山寺区と鳴滝会の合同清掃▶



04 鳴滝の紹介

互谷・両桁山寺区内にある鳴滝は、愛宕山に向かう山中にあり、滝の高さは10メートル以上、八郷地区で一番大きな滝。瓦谷の地を訪れた江戸時代のひとの文書には、「桜が並び咲き、水しぶきと花びらが乱れ散る様は風流で、巨大な岩が幾重にも重なり、江戸の近くにあらば、名書・名画など数多く制作されただろう」と記載があるほど。滝の近くまでは林道が整備されており、高齢者でも簡単に滝のそばに行くことができる。駐車場は10台程度。



02 鳴滝の場所



05 鳴滝会の活動

鳴滝の清掃は、両桁山寺区が、年2回(7月・12月)行っており、鳴滝会はその間の時期に活動している。令和元年の台風19号で、滝周辺で倒木が相次ぎ、手すりが壊れるなどの被害があった際は、鳴滝会で手すりや石段の修繕、滝見所も整備した。

清掃活動を行うなかで、愛宕山・難台山を歩くハイカーから、鳴滝から愛宕山に向かう山中の道が荒れているので、整備してほしいという声を聞き、平成20年の頃から愛宕古道の整備を開始。10年かけて少しずつ作業を進めた。



03 鳴滝会のここがすごい

関係人口を創出する地域住民の動き

鳴滝会のメンバーである、宮部誠さんは、JAやさとが、都内在住の生協会員(東都生協)向けに行う田植えイベントの受け入れを行っていた。宮部さんが、そのイベントに参加していた都内の参加者を、そば打ち交流会(鳴滝会主催)に誘い、鳴滝会のメンバーは県外に広がってき、今では、両桁山寺区内で栗畑の管理を始めたり、八郷地区で2拠点生活を始めたたりする人も登場している。



紹介してくれるひと

鳴滝会 会長 岡野力さん

鳴滝のある瓦谷・両桁山寺区在住。趣味は50代後半から始めた蕎麦打ち。JAやさとの経営する飲食店や直売所で販売するお蕎麦を打っています。公民館講座のそば打ち教室の講師を務めることも。鳴滝周辺の清掃活動が終わったあとは、鳴滝会のメンバーの手料理とそばで懇親会を行っている。



「たんぼ作りプロジェクト（東田中北ノ入）」

01 たんぼ作りプロジェクトとは

企業の環境保全のとりくみとして、NEC・NECネットエスアイの両グループ社員との協働により、荒廃水田を再生し、栽培・収穫した酒米「五百万石」から清酒を醸造している。醸造は、高浜の酒蔵「廣瀬商店」が行い、日本酒のラベル貼りなどは、近隣の福祉作業所に依頼。米づくりのコーディネーターは、管理人である矢野徳也さんが行う。コロナ前は年間のべ1,000人が訪れていたが、コロナで現地での社員参加が一時中断。今年から再開した。



04 東田中北ノ入りたんぼの紹介

東田中地区内で、30年以上耕作放棄地になっていた、約7,500平方メートルの谷津田。谷津田とは、谷地にある田んぼのこと。東田中の住民で、環境保全活動に取り組むNPO法人アサザ基金の理事を務めていた川口明さんの仲介で、2003年12月から再生活動をはじめ、2004年度から無農薬の田んぼづくりを始めた。



02 東田中北ノ入り田んぼの場所



05 たんぼ作りプロジェクトの目的と期待される効果

田んぼは、住宅街の南台地区のすぐ近くに位置し、驚くほど豊かな生態系が復活している。プロジェクトを進めるうちに、谷津田周辺の水質が改善され、トンボやゲンゴロウなどの昆虫、カエルなどの両生類など、多様な生物が生息しはじめた。

このプロジェクトの目的は、食料生産ではなく、環境保全で、酒米の収穫は副産物と位置付けているのが特徴的。谷津に雨が降ると、台地上の森や斜面の雑木林の土に蓄えられ、ため池が作られる。ため池は谷津田の水源であり、谷津田があることで、豪雨時の洪水被害の軽減にもつながる。環境面や防災面から、自然を学ぶ場としての価値も高く、近隣の小学校の見学を受け入れたこともあるほか、大学の研究の場としても使われている。



03 たんぼ作りプロジェクトのここがすごい

企業、地元事業者、福祉作業所、地域。多様な主体と継続的に事業を進行

プロジェクトを進行する矢野徳也さんは、米作りの経験はなく、東田中区の古老や市史の民俗や農事に関する資料にあたって、谷津田の再生を行った。企業と協働で、18年間、田んぼの無農薬無肥料栽培をすることで、ハイケボタルまで見られるほどの環境を保ち、難しい酒米の栽培を続けている。NECグループの中には、18年にわたりプロジェクトに関わっている人もおり、年間10回以上、石岡市を訪ねている。環境省、文科省などから表彰、国連生物多様性の10年日本委員会の連携事業に認定されている。



紹介してくれるひと

ジェオアート研究会・筑波山地域ジオパーク
推進協議会教育学術部会 矢野徳也さん

東田中の田んぼ作りプロジェクトをきっかけに、2008年に高浜に移住。NEC・NECネットエスアイグループから、東田中の田んぼの管理を受け、グループ社員と協働で田んぼづくりを行う。

問い合わせ：
geoart@kfy.biglobe.ne.jp



「中山のお茶畑再生プロジェクト」

01 中山のお茶畑再生プロジェクトとは

標高250~300mに位置する約27,000平方メートルの耕作放棄地となっていたお茶畑の再生活動。2015年に市内在住の男性たち5名でスタートし、7名、平均年齢77.7歳で活動している。現在の茶畑の再生率は1割程度。年間を通した草刈りなどの環境整備を行うほか、失敗が少ない紅茶づくりからスタートし、2019年には緑茶・白茶づくりを始め、春・夏・秋年3回のお茶づくりを行っている。2021年からは、茶の実油づくりなどに挑戦。

八郷のお茶文化・開拓地の歴史を継承し、茶畑を再生させ、子どもたちの自然体験の場、自然に囲まれた公園にしたいという思いをもち、若い世代と連携しながら、活動している。



04 中山のお茶畑の紹介

朝日トンネルに入る前の信号を右折し、菖蒲沢、小野越、仏生寺という地区をすぎて、山をのぼっていった先にある中山という地区。ここには戦後、満州から帰国した人が入植し開拓した場所があり、1960年頃にお茶栽培、ミカン栽培が始まった。このなかにある細野喜平さんが開墾したお茶畑、27,000平方メートル。写真は、喜平さんの死後に妻 富子さんが夫をしのび建てた「拓魂碑」。富子さんの死後、2008年にお茶畑が市に寄付された。



02 中山のお茶畑の場所



05 中山のお茶畑再生のきっかけ

北村明久さんいわく「年をとったら、女性は外に出てコミュニティを作っていくのが得意で、男性は苦手でもりがち」そんななか、自分たちも外に出て何かやりたいという思いをもった男性たちで、拠点探しをしていたところ、お茶畑に出会い、再生活動が始まる。草刈りなどの環境整備だけでなく、茶葉を収穫して行うお茶づくりは、みんなで取り組めて、味わえるのが醍醐味。それぞれで気が付いたことを行うというゆるやかなつながりのなかで、続いている。

Before



After



03 中山のお茶畑再生のここがすごい

関係人口が関係人口を生む連鎖

麓からは車で10分ほど、標高250mから300mの場所に位置しているため、多くの住民は山をおりて暮らし、お茶畑やミカン畑は原野となっていた。お茶畑再生プロジェクトを始めた男性たちも、市内には住んでいるが、中山地区の住民ではなく、ある意味で関係人口といえる存在。最近では、市内外の若い世代が子連れで、茶摘



みに参加するなど、この活動に共感した人々が、集い始め、関係人口が関係人口を呼ぶ流れが生まれている。

紹介してくれるひと

中山のお茶畑再生プロジェクト発起人 北村 明久さん
定年退職後、妻・眞弓さんの実家のある石岡市(小桜・弓弦)に移住。お茶畑再生のほかにも、2019年に地元住民と移住者で自給農業をすすめる「八郷自給の会」(現在50世帯参加)を立ち上げ、月1回、学習会を開催している。今年から、菜種油を自給するため、菜種栽培などの活動もスタート。

問い合わせ：
kabakita816@lime.plala.
or.jp



説明動画を



チェック!

「BookCafe えんじゅ」

01 BookCafe えんじゅとは

当初は、古民家を借りた木崎早苗さんが、個人的に使っていたが、素晴らしい場所や家に可能性を感じて、古民家をコミュニティスペースとして開いた。子育て中のお母さんたちを対象にした古典や詩歌をよみ、感想を話し合う国語の会や、コンサートや講演会などを行っていたが、2020年の9月から、第4土曜日に「トークサロン」という企画を定期開催。医療、歴史、建築、農業など幅広いテーマで開催している。

店名の由来は庭のエンジュの木。名前のおり地元の人や移住希望者など、いろいろな人との縁をつなぐ場所になっている。



02 BookCafe えんじゅの場所



03 BookCafe えんじゅのここがすごい

古民家を生かして、人が集う場をつくり、それが、また古民家を生かす循環を生む

トークサロンは参加費をとって運営しているが、企画運営自体は、ボランティアスタッフが担う。参加者は、つくば市や水戸市など市



外の人も多く、参加費は、建物の修繕にあてられ、継続してトークサロンを開催することで、床を張り替え、台所と玄関扉を整備することができた。

04 BookCafe えんじゅ・トークサロン

講師は、石岡市在住や、思いを寄せてくれている方たち。

- ・第1回 「地域で安心して最後まで暮らすために」せせらぎ在宅クリニック院長 清水亨
- ・第2回 「小さな生き物から生態系を考える」つくば国際大学教授 岸本亨
- ・第3回 「おもしろ常陸国風土記 茨城郡・筑波郡」ジオアート 矢野徳也
- ・第4回 「暮らしの実験 14,000km歩き旅」ロングトレイルウォーカー 舟田靖章
- ・第5回 「喫茶法—お茶を一服どうぞ・茶の湯から広がる世界—」裏千家准教授 穴戸由美
- ・第6回 「あなたの知らない炭の世界—バイオ炭について—」農業環境変動研究センター・上級研究員 岸本文紅
- ・第7回 「八郷の魅力を生かした地域づくり」筑波大学社会学域准教授 山本幸子
- ・第8回 「小説のできるまで」漫画家・小説家 折原みと
- ・第9回 「脳はわがままなお友だち」中央大学理工学部教授 壇一平太
- ・第10回 「仏像からみた茨城の仏教史」真言宗智山派文殊院住職 黒澤彰哉
- ・第11回 「木綿とくらし」木綿織師 久保田誠
- ・第12回 「北欧諸国の男女平等政策」翻訳家 柳沢由実子
- ・第13回 「漢字と印の話」篆刻家 瀬川敦子
- ・第14回 「生命を育む土壌の世界—自然栽培の魅力—」筑波大学生命環境系教授 田村憲司
- ・第15回 「万葉集の筑波山」郷土史研究家 井坂敦実
- ・第16回 「石岡の歴史を訪ねて」郷土史家 木村進
- ・第17回 「世界が注目!日本の算数・数学の授業」東京学芸大学大学院准教授 成田慎之介
- ・第18回 「八郷の茅葺き民家の保存と活用について」日本茅葺き文化協会代表理事 筑波大学名誉教授 安藤邦廣

令和4年10月末時点

紹介してくれるひと

BookCafe えんじゅ 木崎 早苗さん(写真右)

下青柳在住。教員として30年近く、国語を教える。退職後、地域と関わりはじめ、2016年11月から上青柳にある古民家を活用したコミュニティスペース「BookCafe えんじゅ(石岡市上青柳126)」をオープン

した。流山市と石岡市で二拠点生活を行う野村眞一さん(写真左から2番目)と共同で管理している。



毎週金曜に開いている絵画教室の講師と。

問い合わせ:

bookcafe.enju@gmail.com

説明動画を



チェック!